からだとは・病とは（47） 久し振りのお産に思う　鈴木斉観（せいかん）（斉観堂治療院）

７年振りのお産となった。８月 28 日が出産予定日だった。25 日の検診では子宮口がそれ程開いておらず、「まだまだ」と言われた。前２回のお産でもそう言われたが、そうはならなかったと妻が言うので、夕方、仮眠用の寝袋など用意し、また、子供たちには夜に居なくなっていても、心配しない様に言っておいた。果たして、翌 26 日午前２時過ぎに妻に起こされた。車で病院に連れて行った。３時頃入院し、5 時半頃、出産した。3200ｇ余りであった。既に前日から入院していた初産婦は、遅れて６時頃出産した。妻に比べると、かなりたいへんそうな様子だった。その初産婦が母子同室を望まなかったお蔭で、個室が埋まらず、すぐに母子同室になれた。

妻は、新しい浜松市歌を口ずさんで陣痛の痛みを逃がしていた。私は鍼かざしで三陰交から気を瀉して、下腹に集まっている気を抜き、下腹を緩ませ続けた。2 時間余りして、陣痛は激しくなった。児の頭を助産師が受け、少し間があって、体が出て来た。前回は、助産師が間に合わず、立膝の姿勢の妻から落ちてくる様にすーっと出て来るのを私が受け取った。それに比べれば、今回はややたいへんそうに見えた。その後、経過良く、通常ならば 31 日に退院するところを、29 日に退院した。

これまでは助産院で産んでいた。今回もそのつもりだったが、浜松市には二つしかなく、諸事情あって、一時「お産難民」となった末に、近くの大病院にできたばかりの院内助産所にお願いしたわけであった。

助産師による和室での出産は、ある一点を除けば、これまでと同じだったが、検診や、出産後の入院ケアは違いが多く、問題に感じることが多かった。例えば、時間を決められた授乳で児の体重測定を求められた。児や産婦の自然は無視されていた。

産後入院する部屋は通常の産科病棟にあって、出産後のケアは助産所出産でも同じだった。妊婦検診は、途中から助産師だけによるものが多くなったが、これまで助産院で受けた検診に比べて、回数も時間も多かった。

出産時の問題の一点とは子宮収縮剤の注射である。妻は出産後すぐ、脱力した状態で拒否できぬまま、当然の如くに注射されてしまった。自然なお産を心がけた私たちの最大の失敗である。

母乳育児を伝えてあったが、糖水も与えるのが通常になっていて、危うく与えられるところだった。その後、体重が増えないとか、黄疸が強いとかという理由で糖水を勧められた。退院前日、このままでは小児科医が認めない可能性があり、予定通り退院できないかもしれないと言われた。許可無くとも、退院する旨を強く伝えた。妻に聞くと、小便の出が悪いように見えると言うので、児を、鍼かざしで治療した。体重が増えないといっても、母乳育児では当たり前であって、これまでも同様だった。母乳育児の場合、黄疸が長く続く「母乳黄疸」が医学書に載っている。

さて翌日、小便の出が良くなり、体重は増え始めた。黄疸の問題も何も言われず、円満に退院ができた。31 日に予定されていた先天異常検査とビタミンＫシロップ投与は、退院後、断りの電話を入れた。

自然なお産が例外になり、過剰に不自然な処置をするお産が一般化している現状を強く感じた。医師にも助産師にも自然なお産の経験が稀になっているのだろう。(09 年 9 月秋分)